

手芸に対する意識調査

大塚 寿子

I はじめに

わが国は、経済的に大きな発展を遂げ、人々の生活は一世代前とは比較することのできな
いほど豊かになってきた。その中で科学技術の進歩は、人間の手や頭脳の一部までも機械に
ゆだねようとしている。

このような機械文明の中にあっても、先人達の長い歳月の生活の智恵と工夫の中から生み
出された貴重な技術の伝承である手芸は知識の実践への応用の機会を与えるということで、
思考力、集中力、構想力、創造力、忍耐力の育成に役立ち、また心をこめて創作するという
ことから心の豊かさ、歓びにつながり、情操教育に、人間形成にまた社会生活を営む上にも
大きくかかわってくると考えられ、いつの時代にも捨て去ることの出来ないものとおもわれ
る。

「手芸」とは手による作品を総称する、また作品を製作することをも含めるが、私は、そ
れに加えて作品に新しい生命を与えるものでなければならないと定義したい。

本研究はこの手で作るという手芸に対して何事にも敏感に反応する若者の意識を、大学入
学時の1年の学生と、1年、2年を経過した学生を対象にして、その変化を明確にしていく
ものである。

過去においてもこのことを目的とする同じ調査を実施しているので、本論では本年度の調
査結果を説明するに必要とみられる部分についてのみとりあげて比較した。

また、例年短大の学生にも同様の調査を行っているが、今回の調査では大学就学者と大き
く異なる結果を得た部分があるので、参考までに加えて、より結果を明らかに表わす手段と
した。これらの調査結果から、手芸を担当する者として手芸実習に対する指針を得たいと考
えて計画したものである。

	学年	配布数	回収数	回収率
大学	1年	79名	78名	98.7%
	2年	50名	48名	96.0%
	3年	48名	47名	97.6%
短大	1年	58名	56名	96.6%

II 調査方法

本調査を実施するに当たって以下の方法をとった。

1 調査期間

昭和62年4月上旬～4月下旬

1年は入学時の手芸実習開講前日を選んで実施した。2年、3年はそれに合わせた。

2 調査対象

本学被服学科学生 及び

短期大学家政科被服コースの学生

3 調査方法

質問方式のアンケート調査用紙を配布し回答を求め回収した。

短期大学家政科被服コースの学生による調査結果は参考までに表に加えた。

4 調査書

アンケートによる設問を、調査の目的別に分類した。

家政学部 学科 年 氏名

■ 手芸に対する意識についてのアンケート

家政科 コース 年 氏名

問1 手芸という言葉から、どんなことを連想しますか。

(1) (2) (3)

問2 手芸に興味がありますか。

(1)ある (2)少しはある (3)余りない (4)全然ない

問3 手作りの必要性についてどう思いますか。

(1)必要である (2)少しは必要である (3)あまり必要ではない (4)必要としない

問4 手作りが必要と答えた人は、その理由を書いて下さい。

問5 手先を使う技術は、脳の働きをよくするといわれますがそう思いますか。

(1)思う (2)思わない

問6 伝統手工芸を伝えていくということに意義があると思いますか。

問7 手工芸関係の展覧会や講習会に行ったことがありますか。

(1)ある (2)ない

問8 問7で(1)と答えた人はどうしてそのことを知りましたか。

(1)友人 (2)広告 (3)雑誌 (4)その他

■ 環境からの影響についてのアンケート

問1 手芸に興味を持つようになったきっかけについて次から選んで下さい。

(1)家族近親者の中で手芸の好きな人がいたから

(2)展覧会で素晴らしい作品を見て感動したから

(3)学校で手芸を習ったから

(4)友人に手芸の好きな人がいたから

(5)その他

問2 手芸を始めた時期はいつ頃ですか。

(1)幼児期 (2)小学校時代 (3)中学時代 (4)高校時代 (5)大学時代 (6)その他

問3 ①家族や近親者の中で手芸をしていた人がいたら答えて下さい。

(a)祖母 (b)母親 (c)姉妹 (d)叔母 (e)その他

②それはどのようなことをしていましたか。

(a)編物 (b)造花 (c)刺しゅう (d)籐工芸 (e)人形作り (f)木彫 (g)七宝 (h)その他

問4 手作りの作品をプレゼントしたことがありますか。

(1)ある (2)ない

問5 問4で(1)と答えた人について、プレゼントの相手は誰ですか、それはどんな時ですか。

相手

(1)家族 (2)親戚の人 (3)恩師 (4)友人 (5)近所の人 (6)その他

目的

(1)誕生日 (2)敬老の日 (3)母の日 (4)父の日 (5)新築祝 (6)その他

■ 学校教育のカリキュラムとしての手芸に対する意識についてのアンケート

問1 大学の手芸実習について、感じたことを次の中から選んで下さい。

(1)作品が完成した時は嬉しい

(2)上手にできないから楽しくない

(3)細かい作業なので嫌い

(4)自分で作ると経済的である

(5)オリジナルな作品を作ることができて良い

(6)理論の上に立つ実習には理論の裏付けが必要であると思う

(7)手作りの作品が人間関係の上に役立っていると思う

(8)その他

問2 手芸の実習で作った作品についてほめられたことがありますか。

(1)ある (2)ない

問3 ほめてくれた人は誰ですか。

(1)祖父母 (2)母親 (3)父親 (4)兄弟 (5)姉妹 (6)親戚の人 (7)近所の人 (8)その他

問4 学校の細目以外に作品製作したことがありますか。

(1)ある (2)ない

問5 問4で(1)と答えた人は答えて下さい。

①なんのためですか。

(a)プレゼントするため

(b)自分で使用するため

(c)展示会に出品するため

(d)その他

②それはどんなものですか。

(a)セーター (b)ベスト (c)カーディガン (d)マフラー (e)ストール (f)テーブルセ

ンター (g)その他

③その理由は何ですか。

(a)作ることが好きだから (b)学校で学んだ技術を生かしたいから (c)余暇を有効に

利用することができるから (d)経済的であるから (e)オリジナルなものを作ること

ができるから (f)プレゼントすると、心がこめられているので喜ばれるから (g)家

族が喜ぶから (h)その他

問6 問4で(2)と答えた人は、その理由は何ですか。

(1)作ることが嫌いだから

(2)今までに習った技術では出来ないと思うから

(3)余暇は別なことをしているから

(4)既製品でまにあうから

(5)面倒だから

(6)アルバイトが忙しいから

(7)その他

■ 参考としての被服系志望の動機及び卒業後の進路についてのアンケート

問1 被服系の学科を志望した動機は何ですか。

- (1)被服系の学科が好きだから
- (2)家族にすすめられた
- (3)先生にすすめられた
- (4)教養を身につけたいから
- (5)将来被服関係に就職したい
- (6)その他

問2 卒業後の進路の予定

- (1)服飾関係の学校に進学したい
- (2)教職関係に就職したい
- (3)家事に従事する
- (4)被服関係の研究を続けたい
- (5)決めていない
- (6)その他

III 調査結果と考察

1 手芸に対する意識を問う設問に関するもの

「手芸」という言葉のイメージについては、1年では“手作り”との答えが26%で最も多く、刺繍、編物、趣味の順にとらえている。残り $\frac{1}{3}$ 強のものはそれぞれ広範囲に分散した。それは手芸という範囲を手で作るもの、また、手で作ることをも含めて「手芸」と総称されているため、広い領域にとらえたためと考えられる。2、3年でも考え方は変わっていないが順位は編物、刺繍となっている。これは編物の基礎を1年で習得したためと推察される。その他が26%~46%でその内容は真心、オリジナル、あたたかさ、根気、繊細などとなっている。これは手芸にとって切り離すことのできない重要な内面的要素であり、指導面で留意すべきであると考えられる。

興味の点については、1年では「ある」が66%、「少しはある」が22%に対して2年、3年と年次が加わるにつれ「ある」の数値が減少し、これに反し「少しはある」が増加傾向を示している。「ある」と「少しはある」を加えた数値は各学年ともほぼ同数値であった。1年において、特に興味を示している理由としては、技術についての経験不足のためその難解さについての理解が乏しく、安易なものにとらえているためとも考えられる。

学年が進み高度な技術の習得を重ねるに従って、意識の変化が見られることに加え、次第に社会性も発達し、興味が多方面に分散してくる結果とも考えることができる。1年の学生が、将来年次が進む過程で、どのような変化をとげるか、注目してゆきたいと考えている。

手作りの必要性については、「必要」と「少しは必要」と答えたものが98%~100%を占めた。「余り必要ない」もわずかではあるがいた。

次に、手作りを必要とする理由としては、「心がこもる」と「心のあたたかさ」で約半数を占めた。「個性が豊か」と答えたのは、1年では18%と少ないが、2年、3年では35%~38%となり、高学年になるに従って個性の必要を強く感じていることがわかる。

手先を使う技術は、脳の働きをよくするということについて「そう思う」が88%~96%と、圧倒的に高い数値を示している。「思わない」と答えたものが極くわずかいた。指先を動かすことは、前頭葉の働きを活発化させるので、ボケになるのを防ぐなど、最近マスコミにもとりあげられていることなどが影響しているのではないかと考えることができる。

次に、伝統手工芸を伝えていくことに意義があるか、については「ある」が85%~93%と高い数値を示した。

手芸の展覧会に行ったことがあるかに対し、1年では「ある」が約40%に対し、2年では21%と減少し、3年では47%と増えている。「ない」が予想に反して多いのは、意外な結果であった。2年の学生の1年との比較では、わずかながら増えている。3年の学生の入学時の数値が、15%であったが47%と増加してきたことは、時間的な面と学習意欲のあらわれと考察した。

全体を通して「行ったことがない」が51%~77%と半数以上であることは、カリキュラムの上で時間的な余裕がないことと、地理的条件によるものと考えられる。

「展覧会や講習会などに、行ったことがある」と答えた学生について、その情報入手は、広告、友人によるものが1年、2年では60%~70%であるのに対して、3年では50%と減少している。「その他」の中には教師、先輩、家族が含まれていたことは、問題の問いかけが不十分であったことによる結果であるとおもわれるので、次回の設問については考慮したい。

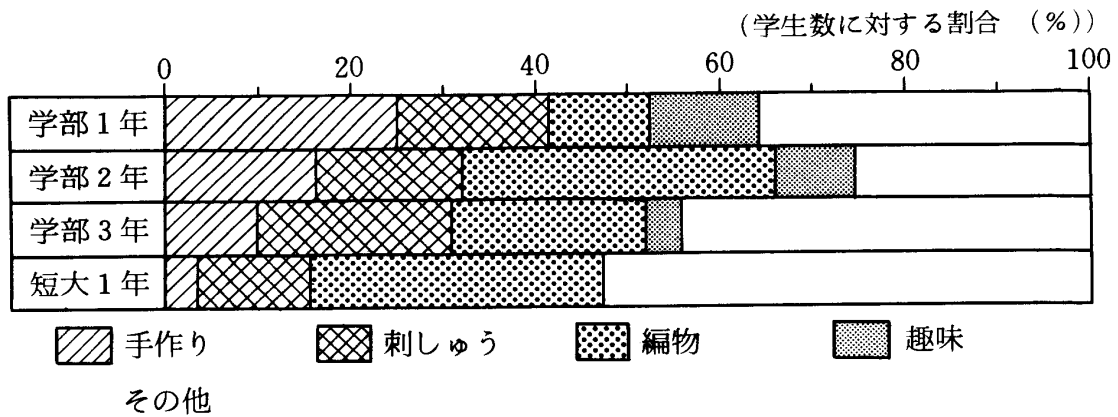


図1 手芸という言葉から連想すること

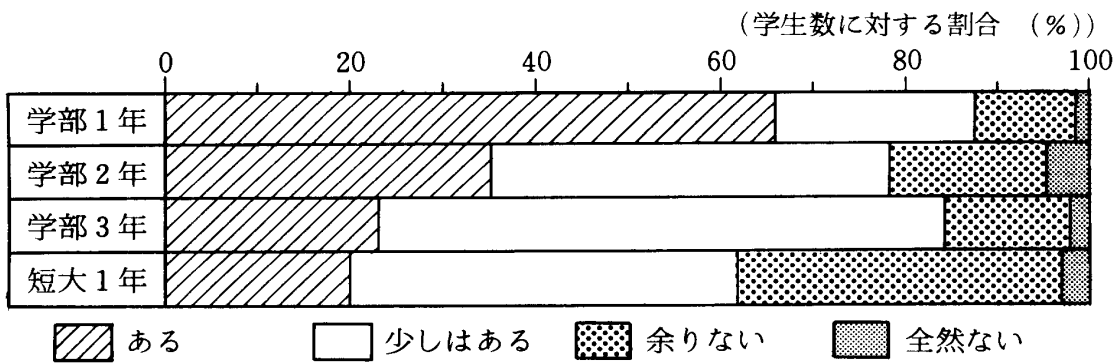


図2 手芸に対する興味の有無

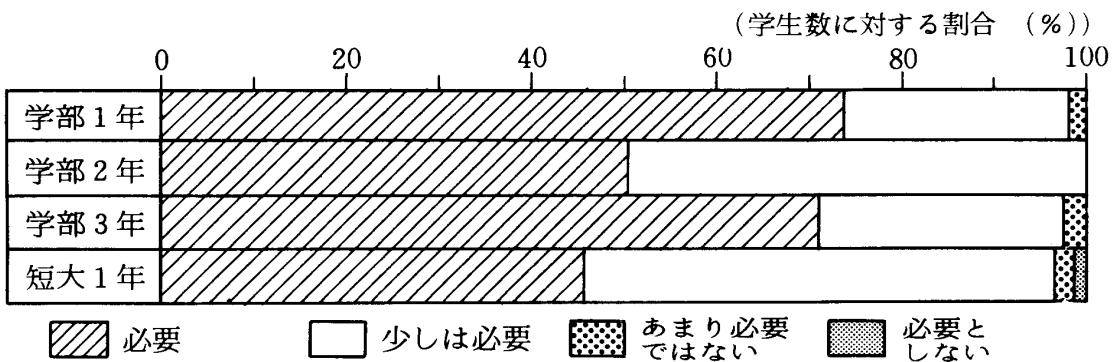


図3 手作りの必要性

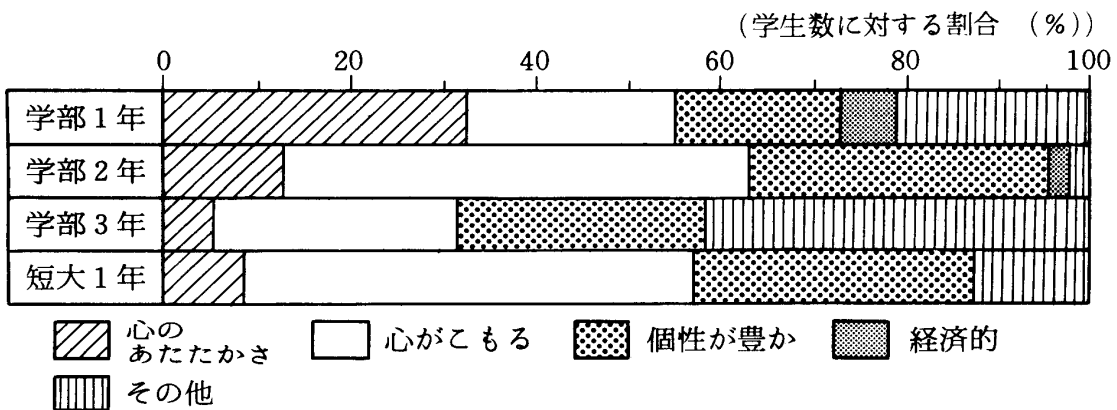


図4 手作りを必要となる意識

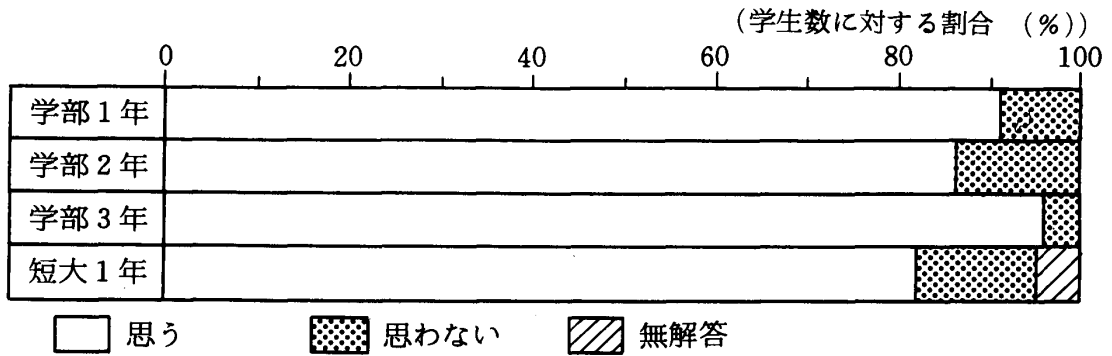


図5 手先を使う技術は脳の働きをよくすると思いますか

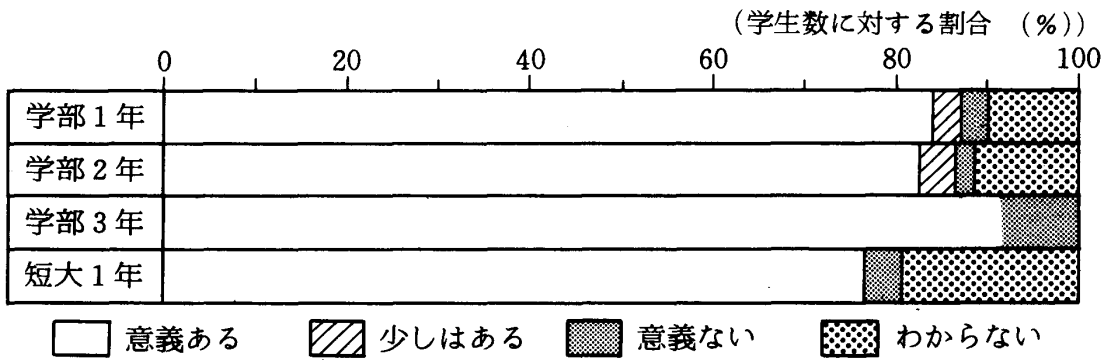


図6 伝統的手芸を伝えることについて意義の有無

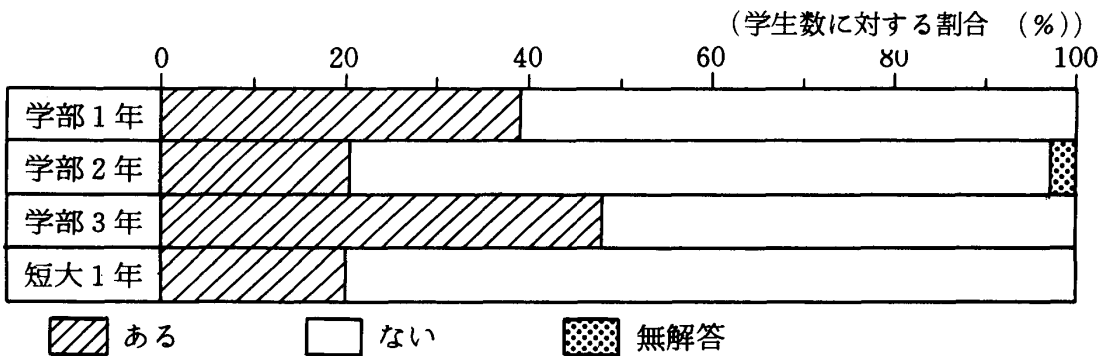


図7 手工芸関係の催しへの参加の有無

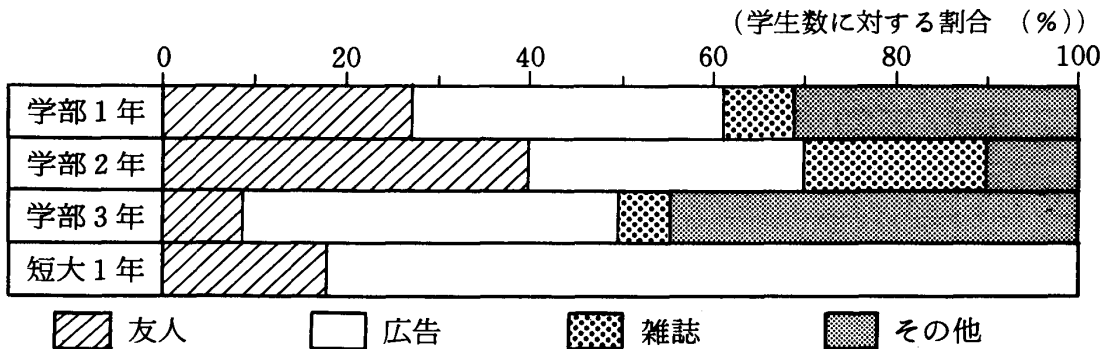


図8 手工芸関係の催しへの参加についての媒体

2 環境からの影響を求める設問に関するもの

手芸に興味を持つようになった動機については、1年では95%と殆んどの学生が「家族の影響」と答えているのに対し、2年、3年では「学校で習ってから」を加えた数値は1年と同数値であり「友人の影響による」がわずかいる。

手芸をはじめた時期については、各学年とも小学校時代が67%~74%を占め、中学、高校、大学時代からという者もわずかではあるがいた。中学、高校のカリキュラムのありかたや学生意識の変容の現状から考えて、うなずけなくもない。

家族、近親者の中で手芸をしている人としては、母親が40%~43%を占め、叔母、祖母、姉妹を含めると80%~95%となる。手芸をしているという環境の中にいる者が多いということは、日常の生活態度、考え方に影響をおよぼし、手芸に興味をもち、被服学科を選択する契機となったものとも考えることもできる。

家庭内で行われている手芸を種目別にみると、「編物」が30%~37%、次が「刺繍」の20%~26%と両者で大きく占めている。続いて、人形、造花、籐工芸、木彫、七宝など、広範囲の分野での手芸が行われていることを示している。これらを併せると全体の82%~87%を占め、最近の“手作り志向”の反映とも考えられるが、このような手芸嗜好の環境の中で生活することは、自ら手芸に対する関心も高まり、興味をもつことにもつながると考えることができよう。

手作りした作品をプレゼントしたことの有無については、「ある」が76%~80%と大きく占め、その相手としては、友人が50%~52%と2人に1人は、友人間でそれぞれ誕生日などに心をこめた贈物をしていることがうかがえる。次は家族が26%~32%で、両者を合わせると76%~82%となり友人・家族で大半を占めている。恩師、親戚の人、近所の人等がわずかいる。

プレゼントした目的は誕生日と答えたものが最も多く50%~62%を占め、敬老の日、母の日と続いている。

学生であるため交際範囲はある程度は限られていると思われるが、その中で手作りのものをプレゼントすることは、互いに心の交流ができるうえに、製作意欲にもつながる効果も考えることができよう。

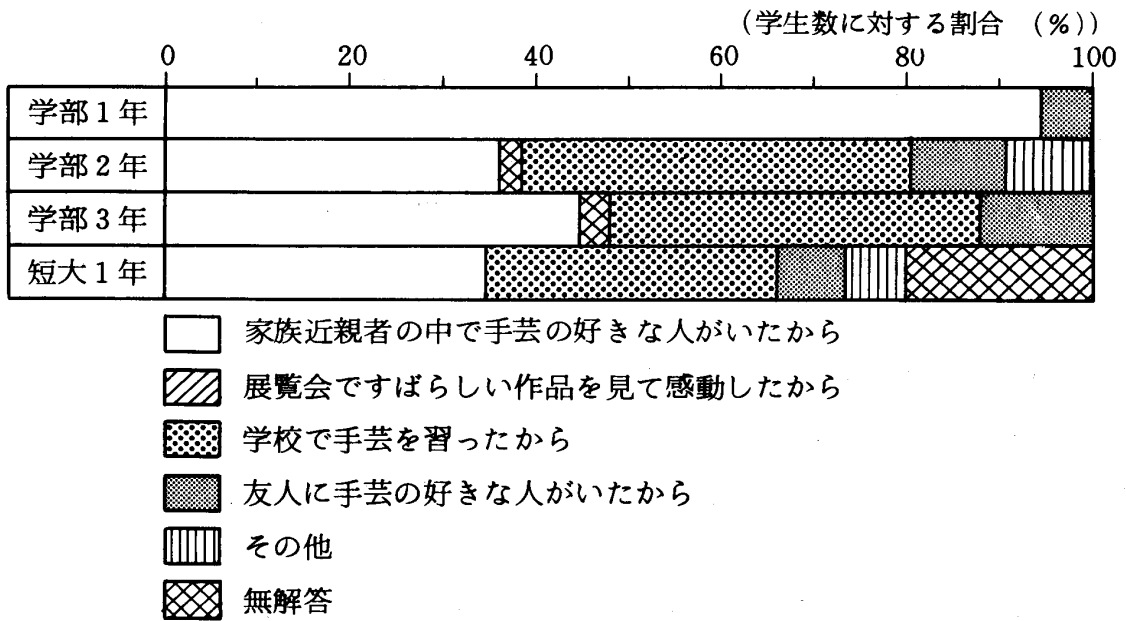


図9 手芸に興味を持つようになった契機

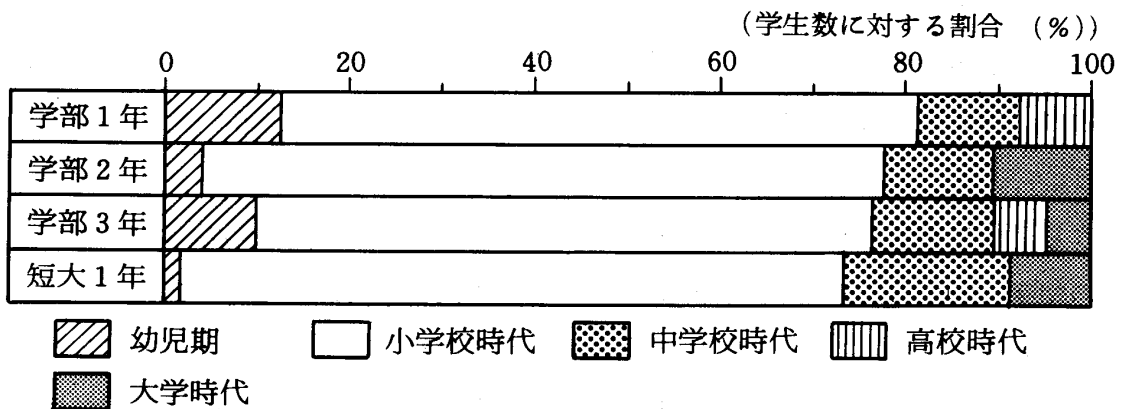


図10 手芸をはじめた時期

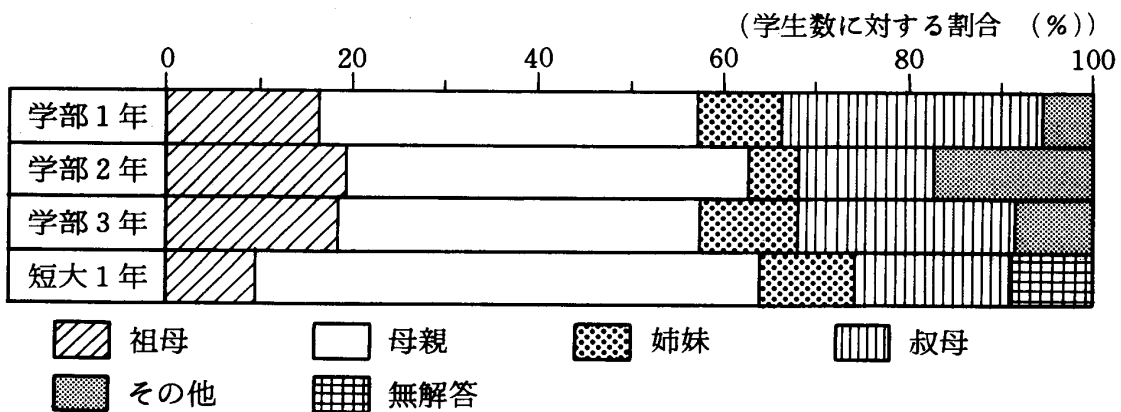


図11 家族や近親者の中で手芸をする人

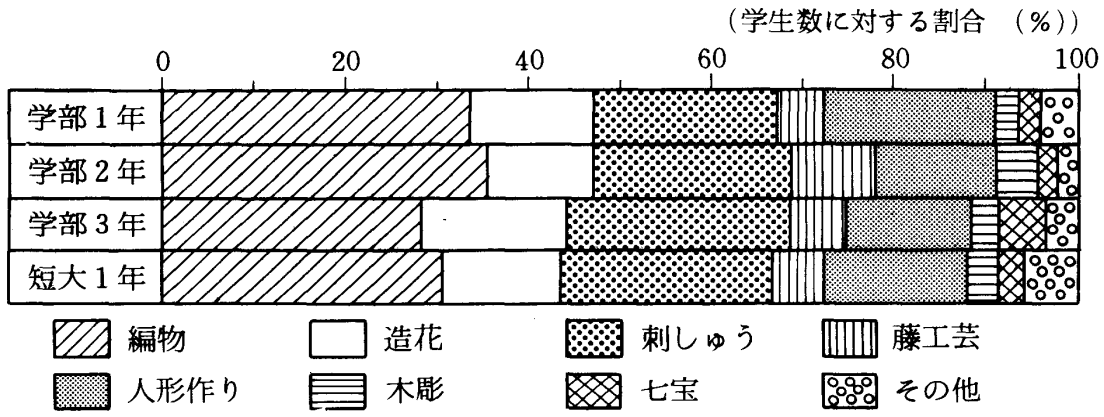


図12 家族の中で行われている手芸の種目

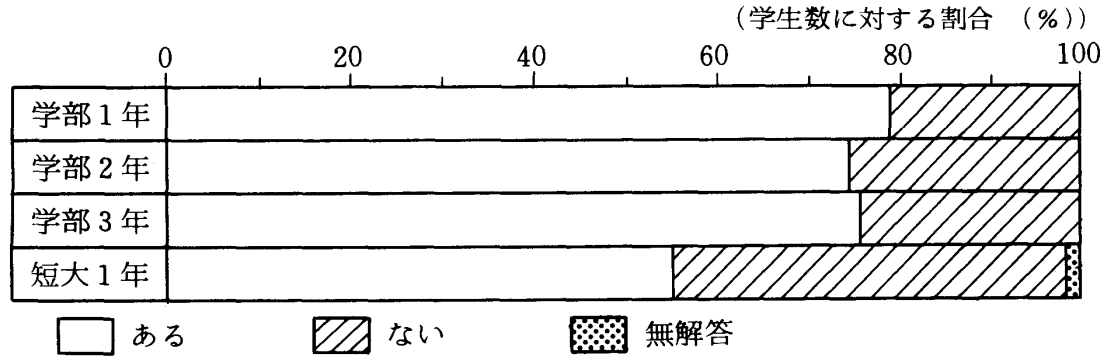


図13 手作りの作品をプレゼントしたことの有無

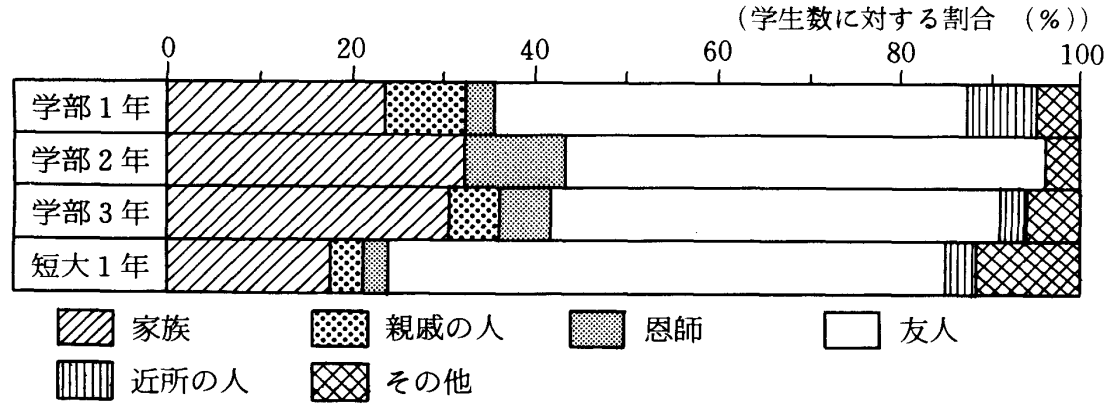


図14 手作りの作品をプレゼントした相手

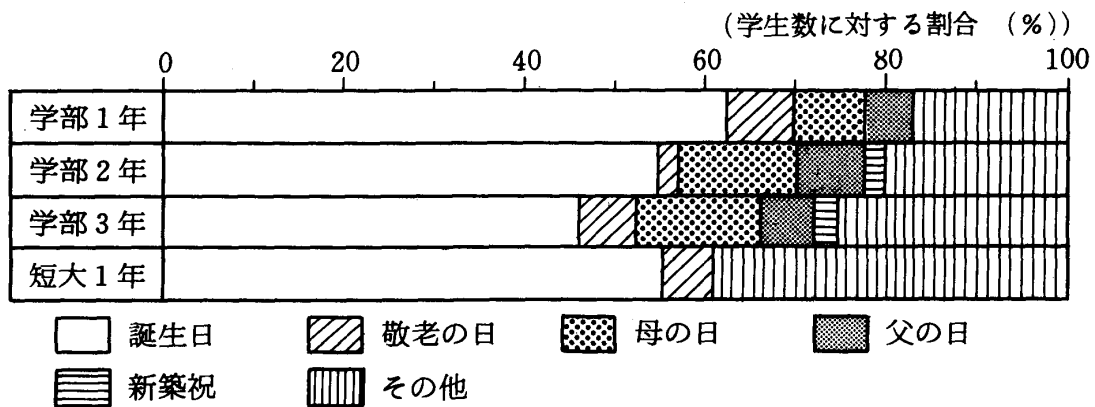


図15 手作りの作品をプレゼントした目的

3 学校教育のカリキュラムとしての手芸に関わる意識を問う設問に関するもの

手芸実習についてどのような感じを抱いているかの回答として「完成した時は嬉しい」が34%~38%「オリジナルの作品を作ることができる」が19%~24%と続き、これらで大きく占めている。「経済的」「実習には理論の裏付けが必要である」「人間関係に役立つ」などが、それぞれ小数值を示している。これらの肯定的意見と反対に、「細かい作業なので嫌い」と感じているものが8%~13%と、約1割を占めていることは、被服学科を専攻する学生の意識としては考えさせられる点であり、指導上留意すべきことと考える。

次に、実習作品について、ほめられたことがあるかの回答は、「ある」が87%~92%と大きく占めた。「ない」もわずかみられる。ほめてくれた人としては、最も身近である母親が34%~43%、続いて祖父母、父親、姉妹、兄弟と家族間で関心を示していることがうかがえる。その他では友人、先生などが含まれている。

人からほめられるということは、まさに自信にもつながり一層製作意欲が湧き、興味を覚える契機となることも考えられる。

細目以外に作品を製作したことの有無については、「ある」が79%~87%占め「ない」が、13%~21%あった。「ない」と答えた者についてみられるのは、中学・高校で手芸を履修しないで進学したために、技術不足で細目に追われ時間的余裕がないものもいるためともおもわれる。

細目以外に作品作りをしている人の目的は「プレゼントのため」が38%~50%と「自分で使用するため」が42%~52%とで大半を占めている。このことは、時間の余裕をみてオリジナルなものを作ってプレゼントや、また自分で身に付けるもの等必要に応じて作っていることがうかがえる。

作品の内容としては、「セーター」や「マフラー」等実用的なものが70%~82%を占め、そ

の他に小物などが含まれている。プレゼントに心をこめてオリジナルなものを手作りしてあげたいというやさしい心をもつということに目をむけてゆきたいと考える。プレゼントする理由については、「作ることが好き」「オリジナルなものを作ることができる」「心のこもるプレゼントは喜ばれる」「余暇の利用」の順で、「経済的である」と答えたものがわずかいた。心をこめて作ったものをプレゼントして、相手に喜んでもらいたいという心情が若者の中にあることがうかがわれ、このことを重要視してゆくべきと考える。

細目以外には作らないという理由としては「余暇は別のことに当てている」が、35%～44%、続いて、性格的に「面倒である」が11%～27%「既製品でまにあう」7%～15%「アルバイトが忙しい」「作ることが嫌い」の順となっている。3年では「アルバイトが忙しい」が22%を占めており、これらは現代の学生気質を反映している結果ではないかとおもわれる。

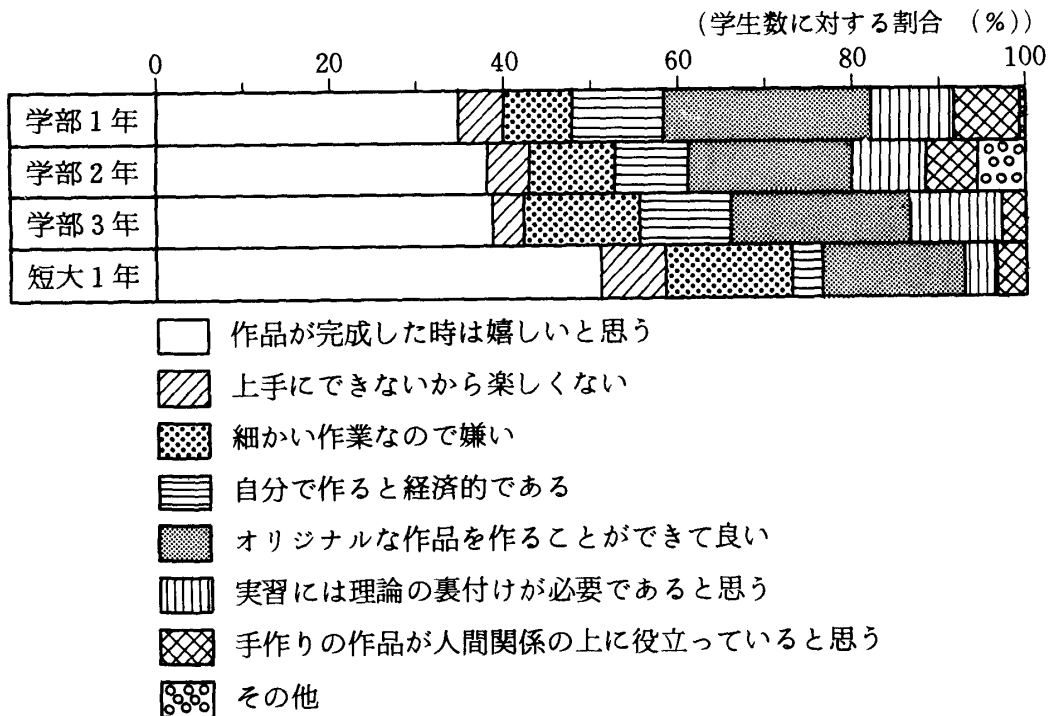


図16 大学の手工芸実習について感じる事

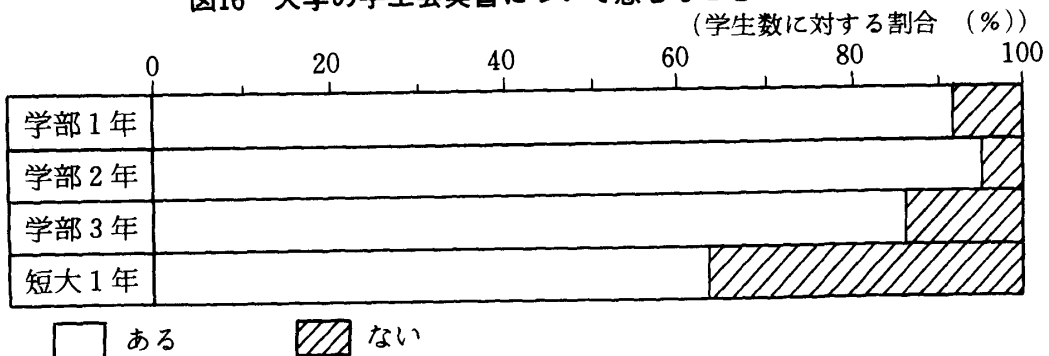


図17 手芸実習の作品をほめられたことの有無

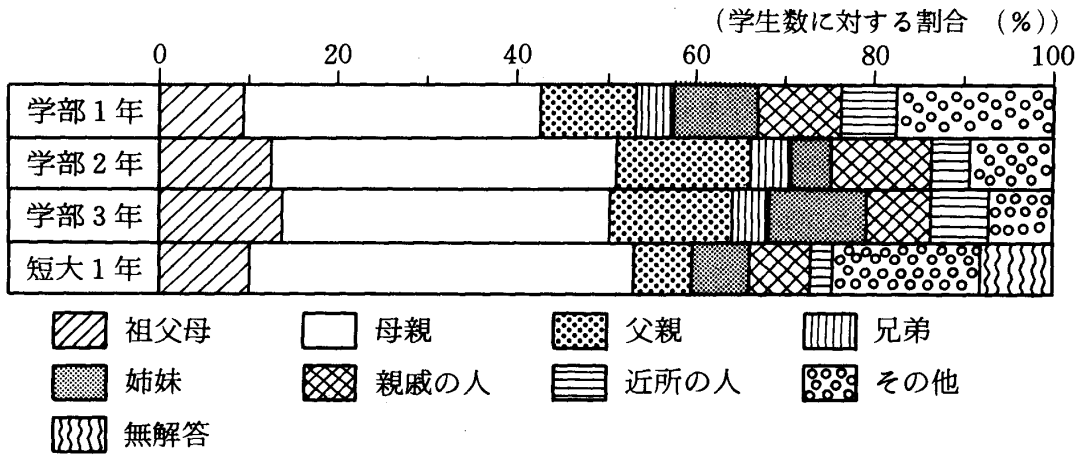


図18 手芸実習の作品をほめてくれた相手

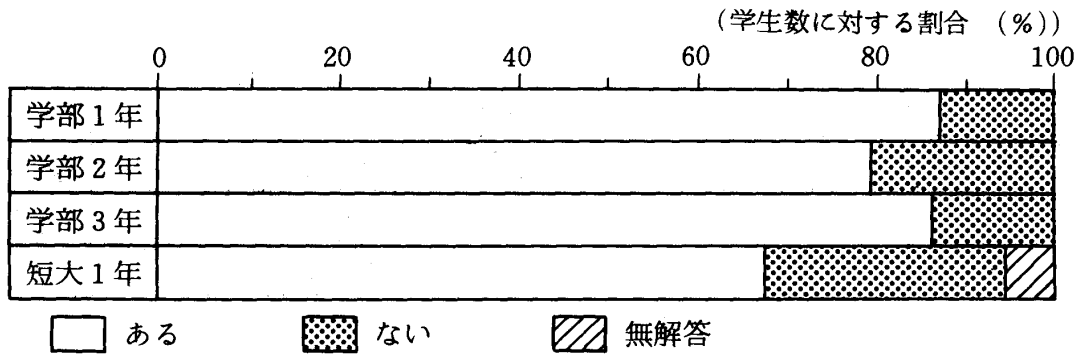


図19 学校の細目以外で作品を作ったことの有無

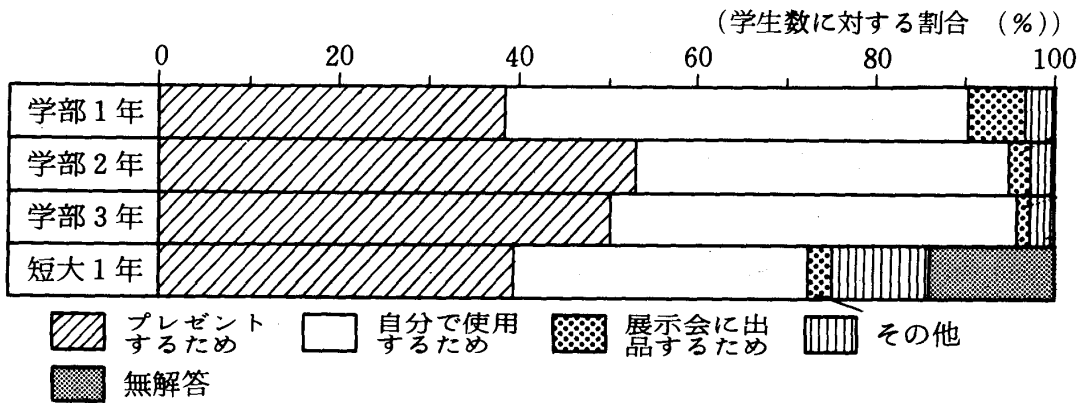


図20 学校の細目以外で作品を作った目的

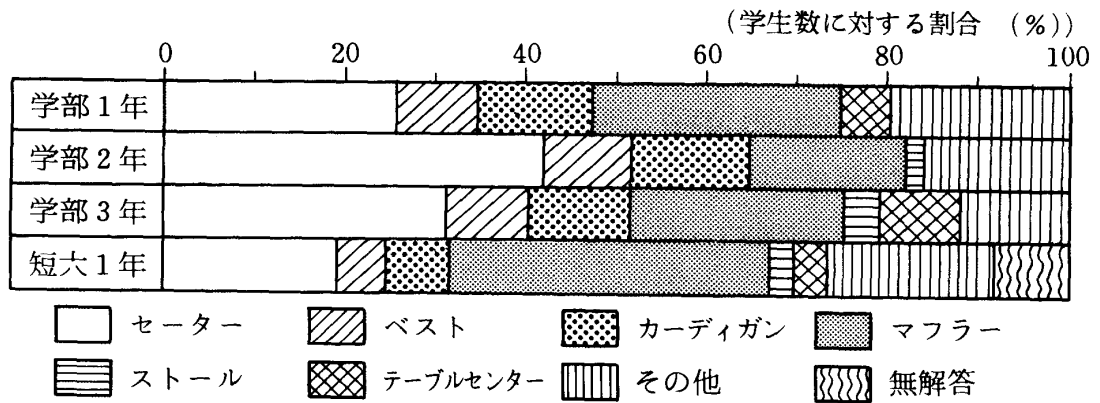


図21 学校の細目以外で作った作品

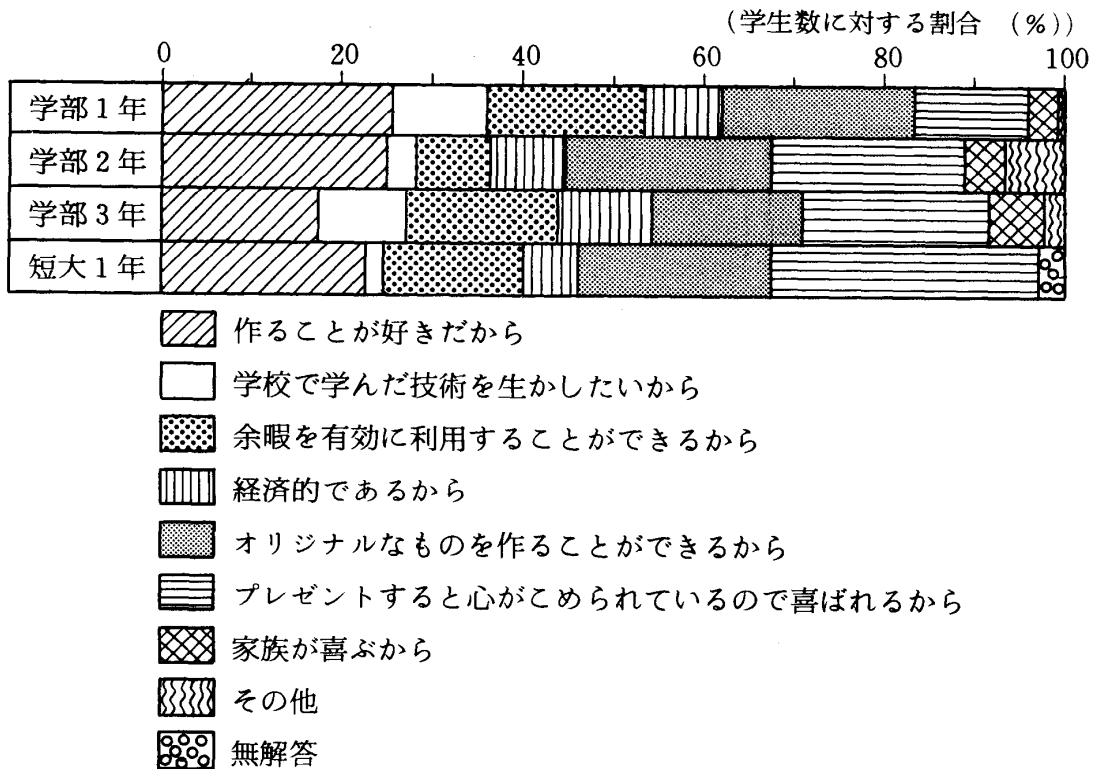


図22 学校の細目以外に作品を作った理由

4 参考としての被服系志願の動機及び卒業後の進路を問う設問に関するもの

志望した動機については、「被服系が好き」と答えたものは $\frac{1}{3}$ 強で、「教養を身につけたい」「被服方面への就職のため」と続いている。

自分の意志で被服学科を志望した者が、1年で79%、2年で58%、3年で71%を占めていた。家族や先生にすすめられたという自主性のない者が20%弱いる。これらの結果からみると、自主性がなく被服を専攻した学生については、手芸に対する意欲の相違は、調査の上では判別しがたいが、前述の調査の諸々に問題点が考えられる面も推察できるので、就学後、

学習意欲を向上させるための適切な指導が必要であると考える。

卒業後の進路については、入学当初から意志決定している学生の意識は、1年、2年を経過した学生においても、以前の調査と比較して意識の変化はほとんどみられなかった。卒業後の進路はそれぞれ異なるが厳しい社会の現実に対面するわけであれば、どのような状況下においても対処できる忍耐力と実行力を手芸という実践教育を通してやしなうべく指導してゆきたいと考える。

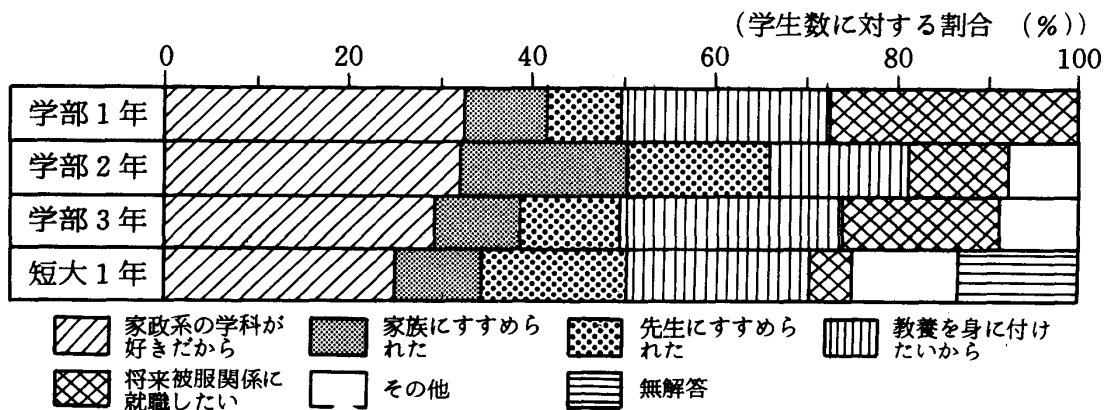


図24 家政系の学科を志望した動機

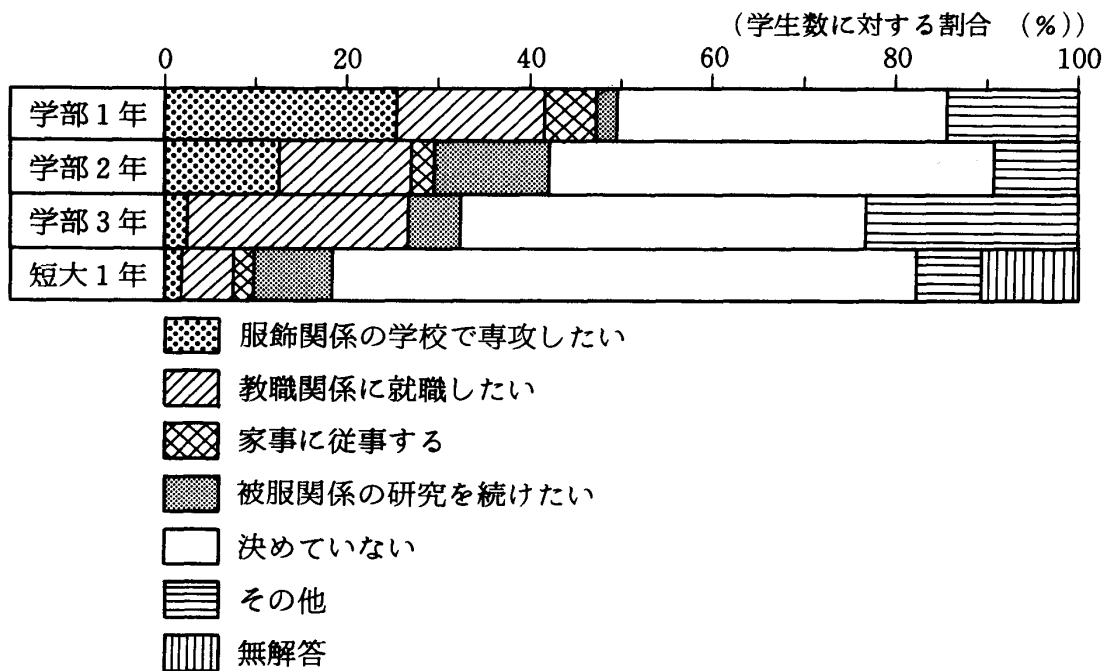


図25 卒業後の針路の予定

IV おわりに

経済のもたらす恩恵は、否定すべくもないが、この豊かな現代社会の中でなぜか、心の空洞化が大きく叫ばれ、物から心の豊かさを求める時代へと積極的に考えはじめられてきている。これらのことから技術を伴う科目である手芸に対して、現代の被服学科の学生がどのような意識をもっているかということを確認し、問題点を見出し、教育面に生かしてゆきたいと考え調査を試みたものである。

意識調査をする上で“技術が必要かどうか”そして“その理由は”を問題の原点としたものである。

調査の結果は、ほとんどの学生が手作りの大切さを認識していることを確認することができたが、しかし、目的意識がなく被服学科を志願した学生が含まれていることもあるためか、わずかではあるが、「必要ない」「きれい」など不見識な意識をもつものもいることは否定はできないが、これらのことを見逃さず対応し自覚を促してゆかなければならないと考える。

表の中で明らかにしたように、参考に掲げた短大生における大学生との意識の違いは、すでに志望校を選定する時点に於いて生じているものではないかと推察するが、これらの関連については、次回、検討していく考えである。

本研究を行うにあたり、貴重な御助言を賜りました大塚綸子先生、又御協力いただきました倉島智恵美氏に厚く御礼申し上げます。

(本学教授)